

南方（ニューギニア）

山西省からニューギニアへ

山形県 海野 米弘

私は大正十一（一九二二）年九月二十二日、父弥作、母つんの次男として山形県西村山郡大江町に生まれました。家業は農業で家族は父、母、長男、私、三男と長男の嫁、それから妹が五人計十一人の大家族でした。

長男は千葉県野田の近くの陸軍飛行隊へ現役入隊しておりました。私が昭和十七（一九四二）年入隊したあと、南方のニューギニアのブーツ島の飛行場に移動したとの通知があったのが最後で、昭和十九年十二月二十五日戦死との通知が部隊か

らあったそうです。三男耕作は昭和二十年二月海軍に入り、九州の特攻隊で教育中でありました。女姉妹五人は私の入隊時（昭和十七年十二月）には他家へ嫁いでおりました。

徴兵検査で甲種だった私は昭和十七年十二月一日、現役兵として弘前の野砲第五七連隊に山砲兵として入隊、第六中隊に配属されました。北支派遣のため原隊から派遣された輸送指揮官の少尉一人、下士官二人に引率され弘前駅を出発しました。下関まで列車輸送され、下関港から乗船して釜山港に上陸、釜山駅からは列車に乗車、十二月三日山海関を通過、万里の長城の威容に感心しながら山西省に入り、十二月十六日山西省の南東部にあり長治県促馬村に到着しました。

ここ潞安は共産八路軍の本拠地に近い所と教えられました。山砲第三十六連隊の第八中隊に配属され、ここで初年兵教育を六カ月間みっちり教え込まれました。山砲を分解搬送する時は六十キロもある砲身を一人がかつぎ競争するなど、毎日死に物狂いで頑張りました。一期の検閲がようやく終わり、昭和十八年六月一日付で一等兵に進級しました。

六月十八日編成替えにより第三十六師団（雪）管理部に編入され、獣医部の部長（大尉）殿の当番兵としていろいろとお世話になっていくうちに雪部隊（第三十六師団）全体が南洋のニューギニアの東部に行くことになり部隊全体が上海に集結することになりました。しかし私はまた、転属することで残り、昭和十八年十月二十七日付で第一軍特別訓練隊に入隊を命ぜられました。この訓練隊では一週間の訓練を受けただけで十一月五日付で今度は第六十九師団（勝）の管理部に編入されました。

その時は南方行きにならず、山西省汾西県の師団の管理部に入隊して内部の事務などをさせられました。班長と私の二人で食糧等の買い付けのため中国の商人の所へ行つて、貨車二両分ぐらい購入、二、三日がかりで帰ってきたことがありましたが中国の商人からは非常に喜んでもらったことなど、今思い出しております。その班長さんも死んでいなくなり残念でした。

昭和十九年三月二十六日付で第六十九師団の管理部から同じ師団の歩兵第六〇旅団の独立歩兵第八十六大隊に転属となりました。そして青島に到着したら各地からいろいろな部隊が集結しており、いよいよ南方方面に行く準備をしているのが分ってきました。

同年四月十日ごろ、集結が終わり青島港を出航、内地に向け出航、十九日に横浜港に着きました。ここでは既に兵隊の内地外泊の証明書が作られていることが分り、兵隊は皆飛び上って喜んでいました。

昭和十七年十二月入隊してすぐ山西省の山中で戦争に明け暮れ、ようやく一年半振りに祖国の土を踏み一泊の帰宅を許されるとは何んたる幸せぞと戦友同志で喜び合いました。しかし時の情勢は甘くなかったのです。南方方面の情勢が悪化して一日でも早く直行するよう命令が下されたのでした。兵隊達の落胆振りを目を覆うばかりでした。船上から祖国に別れを告げる兵隊たちの胸の内は察するに余りあるものがありました。父よ、母よ、子供よ、妻よ、さらば！さらば祖国よ！さかえあれ！

昭和十九年四月二十六日、祖国の土を踏むことが許されず内地の見納めと残念がっていました。命令なので仕方なく元気を出して出港したのですが途中太平洋を進航中、何回となく米軍の飛行機が発見されて前進出来ず、止むなくパラオ港に寄港しました。港内は沈められた艦船のマストが水上に林のように林立しており接岸するのが困難な有様で前途多難が想像され暗い気持ちになりました。

た。

昭和十九年四月三十日、多少の食糧を補給してパラオ港を出航しニューギニアに向けて進んだのですが状況が非常に悪くこれ以上進めなくなり、ニューギニアの手前にある小島「トコペイ島」に上陸することになりました。

昭和十九年五月二日、センドアンド諸島のトコペイ島に上陸、二個中隊で同島の警備をすることになりました。人員は三百人の部隊でした。現地人は日本の南洋興発の工場に勤めていたので日本語は片言交りでしたが何とか分かりました。離れ小島で島の中央部が約六メートルぐらいの高さで椰子の樹が数十本あり、十メートルぐらいの先端には一本で約百個の椰子の実がなっていました。現地人の貴重な財産であるので勝手に実を採ることは禁止されました。

夏冬の区別なく年中暑い熱帯特有のスコールが来た時は、しのぎやすくホツとしますが、あとは熱帯のため、勤務中は軍服（防着衣）を着用

しますが、それ以外は裸で食物探しです。

雑草の新芽とかを探すほかには何も無く、到着当時は六カ月分の食糧があつたのですが、それもだんだん無くなり、体の弱い兵隊は毎日、何人かが死んでゆくようになりました。意外なことに軍医さんが早い時期に亡くなりました。なんでも食う者が最終的に生き残ることが出来たと思います。普段の生活が苦しい者が耐久力に富んでいて、楽な暮らしをしていた者ほど飢餓に弱いことが、

この南洋の孤島の生活が証明していると思います。最後には三百人が僅か百人しか生き残ることが出来ませんでした。

私はデング熱に罹り四二度の高熱が一週間程度続き、大抵の人は熱のため死ぬのですが私は幸い助かりました。デング熱で助かったのは私だけでした。高熱のため私の体から雑菌が絶滅したので助かったのだと思います。

ニューギニアの北の島であるトコベイ島は米軍の爆撃機が空いっぱいになって爆撃するので、防

空壕を掘って退避しました。対空砲が二門ありましたが初期のうちに破壊され、その後は米機の思うままにやられ、餓死する者や爆死する者で、またたく間に戦死傷者と餓死者で生地獄でした。私は夜間に椰子の樹に登り毎日一個ずつ椰子の水を飲んでいましたので、これが栄養源となり命をつなぐことができました。飲んだ殻は下に落とさず椰子の葉の根元に隠していたので原住民にも知られなかったのだと思います。

この島は貧しいので、女性が子供を出産する時は、カヌーに乗って大きな島かニューギニア本土に移ったそうです。ここでも原住民は日本語を片言で話していました。椰子の実は十メートルぐらいの先端に一本で実が百個ぐらいあるので、私が毎日一個飲んでも原住民に迷惑をかけることはなかったのです。人間が生活するのに不可欠な塩分は周りが海ですから充分に取れましたので生き残れたのだと思います。魚も空襲の合間に捕れませんでした。

上陸時に携行した通信機器も逐次部品の補給に困り、連絡も絶えがちになり、終戦も全く知らず、米機のビラを拾って真偽のほどを確かめました。

海軍兵十人ほどがカヌーで接近してきましたが激しい海流に流されて島の裏側に漂着したことがありました。その後の情報が分からずでしたが終戦前後になって全員自爆したとのことでした。原因は不明ですが脱走したのか？戦争の生んだ悲劇の一コマでした。

セントアンド島のトコベイ島の海岸は水深二千メートルといわれ、我々が派遣されて上陸する時は貧弱な栈橋があるだけでした。輸送船から栈橋に移る時に誤って海中に落ちた兵隊が沈んだきりになることがしばしばありました。

米軍機の空襲は日本軍の上陸以来連日続き、その都度防空壕に退避して難を逃れ何回となく死ぬ目に遭いましたが、自分だけは祖国に帰らねばと思いい警備を毎日勉めました。そのうちに米軍の飛行機がやってきて「日本が負けた」というビラをま

いて行きましたので、今度こそは上陸してくるぞということでも毎日元気な者だけで陣地の補強をやりました。弱い兵隊は食う物を採る力もなく次々に餓死してゆきました。

十月末にまた米軍機が来て日本語で戦争が終わったことを知らされて、先日のビラが本当だったと思いました。十メートル以上もある椰子の木に登る体力のある兵隊は私の他に一人いるだけでした。陸軍記念日の三月十日に中隊長の命令で生き残っている者全員に一個ずつ椰子の実が支給されることになり、私ともう一人の兵隊が約百個の椰子の実を採って、皆から「こんなうまい水が吞めてありがたい」と感謝されました。

餓死者の遺体はまとめて重油をかけて焼き、遺骨箱に収め、氏名が分かるように書いて置きました。帰国する時、私の同郷の者の遺骨を持って帰り留守宅に届けて遺族の方から感謝の言葉を頂きました。(昭和十九年六月上等兵に進級しました)。

昭和二十年十月末に米艦が来島して武装解除を

しました。生き残り全員百人が見守るなか日本軍の武器、弾薬一切を積み込み海上で投棄しました。

その後十五日ぐらいして生き残りの兵隊全員を米艦に乗せて身体検査をして、労働に堪え得るかどうかを見たところ、一人として労働に堪えられない者無しと判定され日本に直行帰国となりました。労働に堪えられると判定されたらフィリピンのマニラで労働させられるところでした。

昭和二十年十一月二日、浦賀港に到着しました。二日間浦賀で休んで我が家に帰ったのは約三年振りの昭和二十年十一月四日でした。留守家族は皆無事でしたが長男に戦死の通知があり残念でした。私は軍人恩給は僅か三カ月不足でもらえませんがマニラで労役に服していたらと思うことともありますが果たして無事にマニラから帰れたか？と思うとあきらめがきます。山形県出身の兵隊でニューギニアから生還したのは僅か五人だけと聞いております。ですから戦友会はありません。

海上機動第二旅団第二大隊・行動概要

佐賀県 織田 武

私は大正十（一九二二）年二月、広島で生れました。そして昭和十七（一九四二）年一月十日、現役兵として歩兵第四十八連隊補充隊に入隊、久留米で初年兵教育を受けた後、四月二十二日門司港を出航、翌二十三日釜山に上陸、二十七日鮮満国境を通過、歩兵第四十八連隊第九中隊（剣第八七〇七部隊）に転属を命ぜられ、二十八日、東寧県城子溝に着きました。

かくして入隊より六カ月、七月十日に一等兵となり、下士官候補を命ぜられました。昭和十八年一月に上等兵、七月に兵長となり、十二月には伍長となり、昭和十九年を迎えました。

当時、大本営は北方進攻作戦（対ソ戦）を中止して南方作戦（対英米戦）に方針を変更し、関東軍には専守防衛態勢をとらせたといわれています。